



入江杏子



土田ユミ



沓名むつみ



上野理子



咲坂雪乃



仙頭美峯



菊地真理



岡夏海



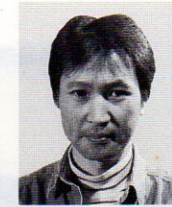
伊藤紘



加藤繁木



服部博行



増山浩一



矢野晴彦



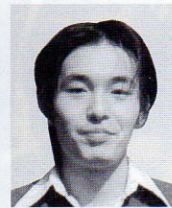
小嶋章



藤野晃



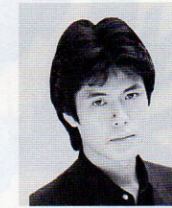
佐々木智



望月大助



紺野康文



西浦慶司



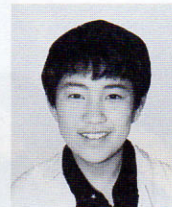
瀬川新一



青木祐真



荒井良介



木村由香里



金城百合恵



小坂裕之



中尾文香

監字：遠井明巳  
編：岡部耕大  
チラシ&ポスター制作：NEE'Room  
同制作協力：Directors Fraction

## 力道山で英雄象徴

1987年12月9日付朝日新聞掲載「87年演劇回顧」より

# 名作が蘇生しました。

「11月に東京・新宿の紀伊國屋ホールで上演された「力道山——まだ観ぬ蒼(あお)き貌(かお)の人」(演出岡部耕大)は、せりふのすべてが肥前松浦の言葉で構成されている点ひとつをとっても日本の独自の文脈を意識していた。加えて、この劇は、昭和をより現代に近い三十年代から見直す意識が鮮明で注目し値した。

舞台は、岡部の出身地を思わせる地方の村。満州から引き揚げてきた一家に初めてテレビがやってくる一日が描かれた。岡部は、テレビに登場し外人レスラーを打ちのめして、国民を熱狂させる力道山に、戦後日本の平均的家庭における英雄の象徴的図像の意味を与えたのである。

劇の登場人物たちは、その時代のすぐあとに始まる農漁村の過疎化を暗示するように日常の退屈さを嘆く、とりわけ女たちは戦後の男のだらしなさをなじり、「この町にも、ヒーローのおればよかとにねえ、力道山のごたる」と嘆息をつくのである。このセリフは、英雄を待望しながら、敗戦をはじめ、幾度となくはぐらかされてきた昭和という時代を見事なまでに集約している。テレビは、マス伝達の特性を十二分に発揮して、力道山という新たな英雄の象徴を全国津々浦々の家庭に送り込んだ。そこで昭和の英雄譚(たし)が初めて幸福な完成を迎えたことを、岡部は言いたかった。典型的な戦後民主主義の論理で、政治構造的にA級の責任を追究しても、昭和という時代の本質にどこまで迫れるかは疑問だ。岡部が登場人物に語らせた「力道山のごたるヒーロー」を求める嘆きは、それこそB、C級戦犯の階層から発せられたものであるからだ。英雄を求める「魔の時代」としての昭和は、A級のみを悪とする図式的な時代認識だけでは語り尽くせない。

初演から9年。大幅に加筆改稿された名作が、決定版として蘇りました。抱腹絶倒、そして悲哀。透き徹った劇世界が心を洗います。「この家にも、ついに力道山が来るか」。昭和31年の春の宵、地方都市のある家庭にテレビが来た日……。たっぷりと演劇の醍醐味に浸ってください。